北海道通信

昭和50年6月12日第3種郵便物認可

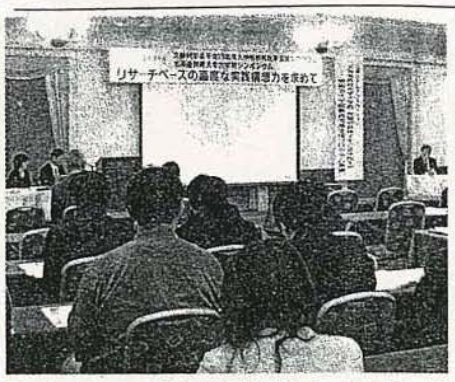
日刊　祝祭日、日曜日、土曜日 休刊　日刊教育版

3年間の研究成果披露

リサーチベースの高度実践構想力

現職教員への支援方策議論

道教育大学がシンポジウム



道教育大学は十三日、ホテルライフォート札幌でシンポジウム「リサーチベースの高度な実践構想力を求めて」を開催した＝写真＝。大学院教育学研究科学校臨床心理専攻で取り組む「現職教員の高度実践構想力開発プログラム」事業の三年間の研究成果を総括し、現職教員への教育実践・研究支援について議論を深めた。

◇

道教育大では、十九年度から文部科学省の「大学院教育改革支援プログラム」の支援を受け、大学院教育学研究科学校臨床心理専攻で現職教員の高度実践構想力開発プログラム事業に取り組んでいる。

札幌・岩見沢（ベースキャンパス）のほか、函館、旭川、釧路校にサテライトが置かれ、現職教員のためのリカレント教育を展開。

学校臨床心理専攻では、「いじめ、不登校、特別な教育的ニーズへの対応など、児童生徒の成長発達とこれに対する指導援助にかかわる学校教育の課題に関して、教育臨床的アプローチを有効に進める高度な専門能力の形成を図る」ことを目的に、現在、現職教員を中心にした四十八人の院生が学んでいる。

今回、三ヵ年の成果を公表し、現職教員への教育実践・研究支援について参加者と議論を深めるために、シンポジウムを開催したもの。大学院修了生、在学院生、現職教員など約六十人が参加した。

はじめに、主催者を代表して大久保和義理事があいさつ。教師として最新の専門的な知識や技術等を身に付けることが求められている中、「プログラムによる三年間の研究成果の発表の場として、シンポジウムが開催される意味は大変大きい」と述べ、議論の深まりに期待を寄せた。

また、プログラムの実施担当者を代表して大学院の庄井良信教授があいさつし、「リサーチベース」「高度な実践構想力」という言葉に込めている意味を、「きょうの学び合いの場で皆さんと深め合って行けるような一日としたい」と話した。

続いて、大学院の植木克美教授が基調報告。プログラムの大学全体としての位置付け、学校臨床心理専攻の教育課程、プログラムの概要・成果などについて話しを進め、シンポジウムにおいて、「プログラムの対象である当事者の学校臨床心理専攻在学院生、修了生の生の声を聴き取り、プログラムの質的評価を行っていきたい」と述べた。

このあと、「道教育大学大学院現職教員修了生と在学院生が物語る大学院教育改革支援プログラム事業」をテーマに公開パネルディスカッションを実施。

修了生の北斗市立上磯小・高木俊明教諭と釧路市立釧路小・中根照子教諭、在学院生の旭川医科大小児科・菅野絵里子心理士と士別市立士別南小・大橋毅士教諭の四人のパネリストがプログラムを通した学びの体験を報告。プログラムへの希望とこれから自分が目指す姿について発表した。

午後からは公開シンポジウム「教育実践・研究支援により涵養されるリサーチベースの高度な実践構想力を求めて」が行われ、学校教員、メンター、専門員、大学教員の立場から五人のパネリストが、コメンテーターの東京大学の勝野正章准教授、東北福祉大学の菅井邦明教授を交え、理論と実践の中で、議論を深めた。